

# 特別講演

英国のロータリー  
米国のロータリー  
日本のロータリー

第259地区  
パストガバナー

入江直祐

## 〈講師紹介〉

明治34年 岡山県生まれ

大正13年 東京大学卒業

法政大学、神奈川大学、創価大学教授歴任

昭和33年 横浜東R.C.入会

昭和45年 第359(現259)地区ガバナー

昭和50年 ロータリー文庫委員長

昭和52年 英国3地区(第102、111、112地区)の  
各地区大会に会長代理として派遣

昭和51~56年 R.I.文献代行者

昭和51年~ 日本ロータリー60年史編集委員



▲講師の入江先生をご紹介する河野秀夫パストガバナー

### ● ロータリーの条件と環境を

備えていたのはアメリカだった

R.I.会長代理ご夫妻、当地区ガバナー、大会役員の皆様並びに本日ご参集のロータリアンの皆様にご挨拶申し上げます。

きょう、この晴れがましい席で、私のつまらないお話を聞いてくださることを、まことに光栄に存じております。

題して「イギリスのロータリー・アメリカのロータリー・日本のロータリー」ということですが、これは清水ガバナーからご提案のありましたテーマでございまして、私は何の気なしにお引き受けしたのですが、いまさらながら後悔をしております。

現在、ロータリーはマキャフリー会長のメッセージにありますように、世界的な規模において考え、かつ行動しておりますが、しかしこれはいまに始まったことではございません。私の

記録によりますればすでに1926年、と申しますとロータリーを創立して21年たったときで、ロータリーの成人式とでも申しますか、その2月のロータリアン雑誌にこういうことが書いてございます。「ロータリーのサービス、奉仕の理想によって、友情でもって結ばれた実業人並びに専門職業人を通じて、世界の理解とgood will——いい言葉を使っております——善意とそして世界的な平和を促進しようではないか」これはすでに60年前のロータリーの主張であったわけでございます。

このころ非常に、世界的、世界的という考え方がロータリーに入ってきて、ロータリーではひとつ英語やスペイン語を使わないで、全部 에스ペラントを使ったらどうだという提案がありました。しかし、いまさら覚えるのは大変だということでこれは否決になったようでございます。

こういうふうに、非常に世界的なあり方にま

で拡大、aufhebenと申しますか、高揚されてきたわけですけども、ロータリーというのはわが論敵神守さんのいつもおっしゃるように、「民主主義、自由主義、それから人道主義のあるところに初めてロータリーは生まれ得る」ということでございまして、こういう環境と条件を備えていたのは、もうすでに封建制度を経過して伝統が余りにも複雑化していたヨーロッパではなかった。新しい国アメリカ——当時はまだ植民地でございましたが、そのアメリカであったことは疑いない。

#### ●職業の相互扶助から出発…

##### やがて、閉鎖社会から地域社会へ

ポール・ハリスがロータリーという組織をお考えになりましたそれより百七、八十年も前、フィラデルフィアという街に27歳になる印刷屋の青年がおりました。彼が自分のお友達の測量屋さんとか、洋服屋さんとか、要するに庶民です、お化け長屋の住人たち。このいわゆる中小企業の庶民を集めて一つのクラブをつくった。この組織者の名前は、後々アメリカ独立の大立者となったあのベンジャミン・フランクリンでございます。

このクラブは、名前がジャントークラブといひまして、陰謀団という意味です。妙な名前を使ったものですが、これは彼の一つのジョークであったかもしれないし、当時の世の中に対する痛烈な皮肉であったかもしれない。そしてこの気持ちは、何と180年ほど後のポール・ハリス先生にも伝わっております。なぜならハリス先生が初めにお考えになったこのクラブの名前は Counters Club (反逆者同盟) として、これは幸か不幸か否決になってロータリーという名前に落ち着いたわけですが、やはり反骨精神というものがそこにはあったと思います。

さて、話はもとへ戻りまして、このフランクリンが書き残しておりますが、中小企業が互いに助け合い親睦を結ぶこの小さなクラブは、非常にうまくいったと。中には数学の教授もい



たけれども、余りに偉過ぎて皆さんと共同歩調がとれずやめていただいた。全く庶民のよき集まりということを強調されています。この庶民性をポール・ハリス先生も大いにつかんで離さなかった軸ではないかと考えております。

それから約180年の後、ポール・ハリスが年齢30何歳にしてロータリーを考えついたのですが、私考えますと、彼は天涯孤独でした。親兄弟には生き別れ、育ててくれた祖父母には死に別れ、無名の一弁護士として人口60万のシカゴ、その当時としては大都会でした。その都会の砂漠の中に彼は孤影悄然として落ち着いた。だれも法律事件など頼みに来る者はおられません。生活は厳しい。彼は自分の名を売るためにあらゆる協会に列席したそうです。

かつまた、吹きだまりのように各地から集まった連中でございます。そこにはコミュニティーというようなあり方、わが町、わが村というような生活はない。彼はさびしかった。自分が祖父母に育てられたあのバーモントの田舎の生活、村の人々がみんな寄り集まって一緒に喜び、一緒に悲しむあの生活が無性に恋しかったに違いない。この孤独感をいやすために、彼はロータリーという親睦団体を考えついたのだらうと私は考えております。

集まった人々は庶民で、決していばった人ではなかった。生活の厳しさ、都会生活のさびしさを痛感している庶民が集まった。ですから商売上の相互扶助を一つのモットーとしたことは当然うなずけることと思ひます。いまは、商売上の相互扶助は一つのタブーになっておるよう

ですけども、成立当時はこれが最も必要な条件ではなかったかと私は思ひます。

このころはクラブ員だけがお互いに助け合うという、要するに閉鎖社会でございました。しかしこの閉鎖社会はそのままではおさまらなかった。あの180年前のフランクリンのジャントークラブが徐々に発展して、あるいは自警団をつくり、あるいは消防団を組織し、あるいは図書60冊の小さな図書室をこさへ——この図書室がやがては後の巨大なペンシルバニア大学となったのですが、そういう閉鎖社会から流れていくという自然発生的なあり方が、ポール・ハリス先生のロータリーにもあり得たのでございます。1909年にはもう Comfort station と申しますか、共同便所をすでにサービスしておられるし、1910年でしたかラムゼー会長がすでに public spirit とか civic needs、公共精神とかコミュニティーの必要条件ということをお口にされるようになったのでございます。これは閉鎖社会から一歩地域社会へ踏み出したあり方であったと思ひます。

#### ●日本のロータリーは奉仕から入った

##### 一つ欠けているのは宗教的条件だらう

アメリカは、こういうふうな要するに庶民性を主軸にしたことがその中心点ではなかったかと思ひます。しかし、いまのアメリカは大都会が大変な勢力を占め、それにいわゆるサラリーマン的なお方は実に移動がはなはだしい。まるでプロ野球のトレードみたいにあっちこっちにスカウトされておりました、子供さんが5人おれば5人とも生まれ故郷が違うという傾向が生じております。要するに故郷を失い、コミュニティーを失いつつあるのです。アメリカのロータリーが、こういう社会情勢を今後どう反映していくか、それを私はある程度心配をいたしております。

しかし、アメリカは広い。その田舎は無限に広い。その広い国土に散らばる村々、田舎の町町はまだ昔ながらのコミュニティー精神、わが

町、わが村の精神で生き続けております。ここがまだアメリカの強さであろうと思ひ、ロータリーの存続と発展もここにかかってくるものと考えております。私は、東京の方々、横浜の方方よりも、むしろ熊谷の方々に今後のロータリーの中心を支えていただきたい。これはお世辞ではございません。

さて、ところで、1920年に米山さん、福島さんが日本にロータリーをお伝えになったときには、アメリカのそれはすでにある程度組織ができておりました。庶民の相互扶助団体から社会奉仕への動きがすでに完成しつつあった。しかもこの米山、福島両氏は大企業のマネージャーです。いわゆる庶民ではございません。かつまた組織運営にも慣れておられた。ですから、日本のロータリーはアメリカのそれとは発生条件が全く違うわけです。要するに、もう完成された社会人が完成された奉仕活動を輸入してきたという次第でございます。

したがって、日本のロータリーは親睦よりもまず奉仕という言葉を取り扱うようになりました。これ、いい悪いは申し上げません。ただ発生条件が、そういうことを必然的にさせたというだけでございます。このため上意下達という形式がそこに残った。われわれ若いとき、ガバナーが公式訪問においでになりますと、直立不動の形をとったものであります。しかし、日本のロータリーが優等生であることは間違いありません。

日本のロータリーに一つ欠けているのは何かといえば、それは宗教でしょう。日本にはいろいろ宗教がありまして、英米のように一つのキリスト教というようなものがございませんのでうまくいかないわけですが、向こうの地区大会などへ参りますと、必ず日曜をはさんで礼拝が行われます。心温まるものでした。いまはもうすたれてまいりましたが、アメリカでは昔ロータリーソングのかわりにロータリー宗教歌を歌った時代がありました。そこには、どうしてもわれわれにはちょっとあり得ない一つの雰囲気

が流れたようであります。これはどうも日本では考えることのできない一つの条件でございます。

### ●イギリスにはクラブ生活があった

#### R.I.B.I.は合議制により成立している

所が変わってイギリスとなりますと、これはご存じのとおり R.I.B.I.—Rotary International in Great Britain and Ireland—こうなっております。ところが丁寧に申しますとそれだけではなく Great Britain と Ireland のほかに Isle of Man という土地、それから Channel Islands 英佛海峡の島々がこれに含まれています。島々というのは織物で名高いジャージーとかガンジーという島々です。これらを称して R.I.B.I. と言っておりますが、彼らは R.I.B.I. とは口ぐせに申しません。一言で、The Association と言っております。

このイギリスには昔からクラブ生活というものがありました。古くは 17 世紀に Rotar Club というのがあって、単なる社交クラブですけれども、偉大なるかの「失樂園」という作品を書いた大詩人ジョン・ミルトンも会員の 1 人でした。とにかくクラブ・ライフはイギリス人の生活に食い込んでいたわけですが、このクラブというのは別に何もしないのです。ただ嚴重な資格を持って入会を許された一定の人が、一定の場所に集まるでもなく、三々五々行ったり来たりしまして、それとはなく新聞を見たり、議論したりしていたのですが、それがイギリスのいわゆる Establish Society と申しますか紳士階級の生活の必須条件になっております。

ですから、ポール・ハリスがロータリーをつくるときは、こういうものを排撃いたしまして、違った観念でクラブをつくりたいと言った。それを聞いたシールさんが「どんなクラブだい」「うん、楽しくてお互いの商売の役に立つクラブにしたい」こう答えたことが記録に残っています。

ところが、何しろイギリスですから、1911年

にいよいよロータリーが入りましたが、アングロサクソンの本場でございます。非常にがんこではありますが、契約主義的、実利的、かつ実証的と申しましょうか、ですからクラブの運営、それを拡大して R.I.B.I. 全部の運営、これが徹底した合議制でもって成立しております。これはわれわれの行き方とだいぶ違う。この点は今後われわれ大いに手本にしなければならないところだと考えております。何しろ 13 世紀にはマグナカルタ、憲法の第 1 ページが書かれたイギリスのことです。すでに合議制というものが行われておりました。

エバンストンのヘッドクォーター（本部）とは別に、R.I.B.I. 本部というものがございます。これはロンドンの南、テムズ川の南でございます。ここの事務所に R.I.B.I. の会長、事務総長、会計担当者、こういう人々が厳然と控えておまして、エバンストンのヘッドクォーターと全然独立王国のごとき観を呈しております。そこでは、文書を勝手に発行する権限も許されておまして、ここに一例を持って参ったのでございますが、こういうふう Housing of The Elders（老齡者に対する住居問題のプログラム）、Vocational Instruction For Deformed（心身障害者に対する職業的斡旋）こういうふうなもの印刷されて、各クラブに回っております。私が各クラブへ行ってみましたところ、全部この R.I.B.I. の本部から発行するこういう文書によって活動しております。いいことか悪いことか知りませんが、事実そういうことになっております。

### ●全体協議会が絶大な権力

#### ロータリーソングを歌わない理由

R.I.B.I. の運営状態を手短かに申し上げます。まず一番上がゼネラル・カウンシル、これはエバンストンの理事会に相当するものでございます。それから会長、R.I.B.I. 本部の役員たち、地区ガバナー 24 人、また R.I.B.I. の中からエバンストンの理事になっている方。これらの人が

年に 3 回以上集まって、万事ここで決議しております。その下に District Council（地区会議）がありまして、ガバナーがその議長になり、出席者はバスターガバナー、それから 3 人から 5 人の副議長がおり、地区の幹事、地区の会計担当、そしてガバナーノミニ。向こうではガバナーセレクトと言っていますが。

それから各地区の部門別委員長がおり、そのほかに各クラブより 2 名ずつ選挙されてこの地区会議に出席いたします。ここで大会のあり方など全部合議制で決めてしまいます。その下にクラブカウンシル、各クラブの会議がございます。その構成は会長が議長、複数の元会長が副会長として出席するほか、直前会長と幹事、及び一般会員から選出された 6 名も参加します。クラブの通営はこのクラブ会議を毎月開催して行われ、先ほど申しました地区会議と合わせると実に頻々と会議を行っていることとなります。このほかにもクラブ協議会、地区協議会、R.I.B.I. 全体の協議会もあるのですから大変なものです。なおこの全体協議会は Annual conference of the association と申しまして絶大な権力を振るっております。

さて、イギリスのロータリーはそういう状態でありまして、要するに個人が中心になっております。地区とかクラブとかは合議体であり、実行機関ではないと考えられ、実行は個人だという考え方が深く浸透しております。青少年交換にしましてもクラブや地区で計画してはいません。各個人が世界中に縁故をたどって実行しております。個人でして、クラブや地区ではございません。

私が会長代理として参りましたら、イギリスのロータリー財団への寄付が非常に少ないところが多い。ある地区へ行きましたら、財団フェローが 3 人しかいない。さすがに私は会長代理という職責上、これにはクレームをつけました、何と貧弱なのだ。わが神奈川地区などは 1,000 名ぐらゐのフェローがいるのだと言いましたら、「そうですか。それは驚いた。ただ、われわれ



はロータリー財団ばかりが青少年への奉仕機関ではない。あらゆる協会とか学会とかで、若き者を勉学させるルートが幾つも幾つもある。われわれはそれにも協力してやる。日本ではそういうのがありますか」ときたので、私は参ったのでございます。日本にはそういうのが余りに少ない。したがって、われわれはロータリー財団に一生懸命に協力しているわけですが、彼らにはそういうルートがたくさんあるので、必ずしもロータリー財団ということが頭に浮かばないようでございます。

もう一つ驚きましたことは、各地区には、大会が開かれると必ずエリザベス女王から祝電が届きます。クラブもそうですが、向こうの大会ではロータリーソングは歌わないで、女王から祝電が届いたというご披露があると、そのとき一斉に立って国歌を歌うのです。ちょっと美しい光景でございました。

この前のガバナー月信に歌のことが書いてありましたね。ところがなぜかイギリスではあれ歌わないのです。どういうものですかね。もっともご存じのとおり、ラッグルズ会長のとき会員が党派別にけんかをしようになったので、その気持ちを一つにまとめようとして Fellow let-us sing「野郎ども歌おうじゃねえか」という標語を掲げたのがもとどさうですから、党派別がないところでは心配はありません。

### ●独自性を尊ぶイギリス人

#### 地区大会もさまざまなスタイルで

それから、イギリスでは例のロータリーの綱

領The object of Rotaryはもちろんですが、別にThe purposes of R.I.B.I. (R.I.B.I.の目標)というのも並んで掲げられています。大したことは書いてありませんが、その中にこういう部分があります。「すべて必要な情報を収集し」——ここが大切なのですが——「R.I.B.I.独自の判定するところによって、この情報を各クラブに流す」こういうことでございます。

こういう独自のPurpose、目標を掲げていて、常に彼らはこれを暗唱しておるのであります。

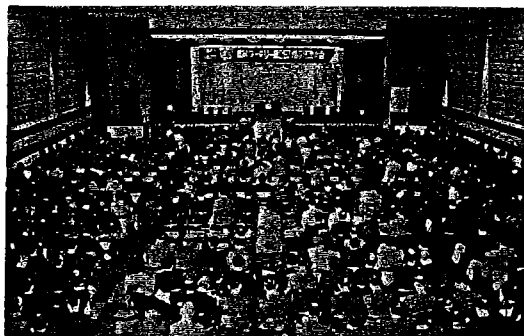
要するに、非常に独自性が強い。私は三つの地区しか回りませんでした。地区ごとに大会のあり方が皆違うのです。日本の大会ですと、どこも大体似ておりますね。いかがですか。ところがあちらではそれがすっかり違っているのです。

たとえば、ある地区へ行くと部門別協議会はやっているけれども、そのガバナーがこう言う。「会員が遠慮もなく自由に話し合っているところへ、会長代理とかR.I.B.I.会長とか、そういういばった人が入っていったんでは、せっかくの自由討論のじゃまだから、あなた回らないでください」と言うのです。そうかと思うと別の地区では、部門別討論会を全然やらない。私が職責上どうしてかと聞きましたところ、彼らいわく「われわれは地区会議、地区協議会、全体協議会等、年に何回もやっておる。そのたびにロータリーの勉強をやり尽くしておるから、久しぶりに全会員が集まって楽しく会合するときに、いまさら何の勉強ぞや」と言うのです。日本では何回協議会をやっていますか、逆ねじを食って一本とられた形でございます。

#### ●モローは無通告常習犯

##### 拡大に熱中するポール・ハリス

そういうわけで、イギリスの各クラブは独自性を持って運営されておるわけですが、そのもとをたどっていきますとイギリスロータリーの設立時点にまでさかのぼることになります。設立がそもそも普通ではございませんでした。



アイルランドにダブリンという街がございます。そこにスチュアート・モローという方がおりました。この方はダブリンのTrinity college (三位一体大学)の秀才でしたが、ロンドンに出て例の有名なMiddle Temple法学専修学院ですね、あれはオックスフォードを出てもケンブリッジを出ても必ずここへ行くのですが、そこへ入りました。行く行くはりっぱなロウヤーになる予定だったのですが、目を患いましてそれを断念いたしました。

そして、新世界アメリカに渡りました。サンフランシスコに住まいました。そこで仕事をしながら、サンフランシスコロータリークラブに入りました。これはナンバー2クラブでございます。そこに入ってしばらくたって、1911年に故郷のダブリンへ帰りました。そしてロータリーのよさが身につけておりましたので、自分の妹の主人、これは保険会社の社長さんでしたが、こういう方と話し合いました、ぜひロータリーをアイルランドにつくろうではないかと。しかし、そのときはやはり商売上の相互扶助というのが一つのモットーになっておりました。いよいよ1911年2月22日、創立総会を行いました。成立したわけでございますが、何とこれはシカゴの本部に全然通知していません。しかし設立の条件は全部整っておったのであります。

それから、いま爆弾騒ぎで激しい北部のベルファーストへ行って、ここには7月にモローさんはロータリークラブをつくり上げております。一方、シカゴの本部でもフィーラーという方をロンドンに派遣しまして、ポール・ハリスさん

の息のかかったロータリークラブをつくりましたが、これが8月3日ですから、アイルランドのモローさんの方がはるかに早かったわけでございます。

それから、モローさんはますます勢いに乗りまして、今度はイギリス本土へ移りましてスコットランドのグラスゴー、エジンバラにつくり上げました。これも本部には無通告でやっておりますが、本部の方でこのことを知ってグラスゴーに連絡を取ったのです。本来ならしかりつけるべきところでございます。無通告はけしからんから、認めないと言ってもいいところですが、ポール・ハリスさんはしかるどころか喜んで認め、かつこれを激励なされたのであります。

その当時、ハリスさんは拡大に熱中しておられた。そのため同じシカゴクラブの会員で国会議員のフォスターなる人物の反対を食いまして、当時ハリスは2度目の会長だったのですが、任期半ばの10月に会長を辞任しております。それほどハリスは拡大に熱中していたので、モローが無通告で幾つもイギリスにロータリーをつくっても、おしかりになるところか激励なされたのでございます。

もっと激しい話もあるのです。これは第1次大戦後10年ごろのことですが、ドイツで1度つぶれたロータリーを再建するというとき、まずハンブルグに再建されたのですが、その予告が何と創立総会の3日前に被メンバーたちに通告されたわけです。すると当時の事務総長——かの有名なチェスリー・ベリーさんですが——がハンブルグに飛んで行って、このキーメンバーに会い、すぐに創立総会を行いまして、翌日にはチャーターを授与したのであります。むちゃくちゃな話でございます。これほど拡大に熱中しておられた時代があったということ、ひとつ申し上げておきます。

#### ●コミッションと称して入会金の50%を…

##### 独立王国R.I.B.I.



ただし、ハリス先生は持って生まれた組織者としての天才でございます。10歳のときすでにその手腕を発揮されたことはご存じと思います。彼がまだVermont collegeの1年生だったとき、暴力学生が暴れ回ってしょうがない。そこで彼は心ある1年生fresh menを集めて自衛組織をつくった。しかし、一体大学の先生なんというのは利口な人は少ないわけですから私もそうなのですが、それで校長のバックナーさんが怒りまして、おれに無断で秘密学生組織をつくるとは何事だと言って、18歳のポール・ハリスは退学を命じられました。そういうふうな若いときから組織能力のある方でした。

そのハリスが組織拡大に夢中になっていたときに、そのモローの所業が問題になったわけです。いろいろ摩擦がありまして、これを認めるべきか否か、今後こういうことがあちこちで起こっては困る、といろいろ議論が出ました。

イギリスでそんなに無通告でクラブをつくったモローという人は、実に奇怪な人物でありました。新しいクラブをつくると、それに入会なさる方の入会金の50%をコミッションと称して自分のポケットに入れた。(笑声)ところが、われわれの感覚ではこれは実に困ったことだと思っておりますけれども、何しろ契約主義のイギリスのこととて、その当時これを何らおかしいことだとは人々は考えなかったのであります。それくらいのコミッションで新クラブができ、会員が増強するならば安いものだと考えたようであります。実にわれわれからは想像もできないようなことなのですから……。

イギリスのロータリーはそういうふうにして成立したわけで、その結果エバンストンの言いつけもなかなか聞かない独立王国になってしまった次第です。1926年、分担金を1ドルから2ドルに引き上げたときになかなかこれに従わなかったのは、その一例です。

またこんなこともありました。当時イギリスで、外国向け封筒に British goods are best (英国製品は世界に冠たるもの) という広告文字を入れたのですが、アメリカのロータリアンがこれはいかんと。International goodwill (世界的な善意) という考え方とちょっと食い違うようだから、やめてほしいと R. I. B. I. に申し込んでまいりました。R. I. B. I. では驚きまして、Post Master General (郵政大臣) にかけてこれをやめてもらったのです。ところが R. I. B. I. のロータリアンたちが承知しない。アメリカのいいなりになるな、R. I. B. I. は必ずしも R. I. のお先棒ではないぞと、大層いきり立ちました。しかし、ロータリーの原則からいってこれは好ましくないということで、一応納得はしたようでございますが。

#### ●他人の欠点をがまんすること

##### インスピレーションとアイデアを携えて…

時間がなくなってまいりましたので、二・三つけ加えて終わりにしたいと思います。マキャフリーさんの今度のメッセージを拝見いたしますと、「友情だけではロータリーの存在理由にはならない。友情プラス奉仕というものがなければならぬ」ということでした。これは私が翻訳係でございますから、よく覚えております。ところが昔の R. I. 会長のケン・ガアンジーの書いたものの中に「友情こそロータリーのすべてを支配し、活動のすべてを律する」というのがあります。しかし私は、これは矛盾するものではないと考えております。いかなるサービス、奉仕といえども、その根底に融和、親睦の大きな心の流れがなければならぬというふうに解釈しております。

1911年2月1日、「ロータリアン第1号」にポール・ハリスが5,000字に上る論文を載せておられます。その中にいい言葉がありました。「他人の欠点をがまんすることが一番大切だ。がまんとは、ただがまんではない。そこには合理精神があらねばならぬ。人道的な感覚がなければならぬ。また他人の信仰を尊重する心があらねばならぬ」こういうことを言っておられます。要するに、友情と tolerance 寛容という言葉がロータリーの大きな精神的支柱であるかと私は考えます。それにロータリーは、決して思想統制をする組織ではございませんから、私は常々考えておるのですが、80万人のロータリアンが世界にあれば、そこに80万個のロータリークラブがあり得ると、こういうふうに言っていると思っております。

きょうは、大変いろいろなことを申し上げましたが、最後に1930年、これはちょうどロータリーの25周年に当たる年なのですが、そのときの事務総長であった有名なペリーさんが、全世界のクラブに招待状を発送されたその文句が非常によかったです。

「海を渡り山を越えて、ロータリーの友よ、メッセージをお送りいたします。どうぞインスピレーションとアイデアを携えて、この大会においでください。ロータリーを偉大な、世界的な奉仕運動にするためには、考える人 (Head) と行う人 (Hand) とをぜひこの大会に送り届けていただきたい」と、こういうものでございます。

きょう、これから部門別討論が行われると思っております。どうぞ皆さん、このインスピレーションとアイデアを携えてご出席ください。そしてこの「考える人」と「行う人」をひとつ発見していただければ幸いと存じます。

つまらぬことを申し上げましたが、ご清聴ありがとうございました。(拍手)